研究論文

2歳児保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容Ⅲ
―SCAT を用いた混合研究法による一考察―

中村知嗣[1]、石田淳也[2]、藤田清澄[3]、本田由衣[4]、松延毅[5]、松延摩也子[6]、香曽我部琢[7]
[1]学校法人恵愛学園愛泉幼稚園 [2]メリーポピンズ朝霞台、[3]盛岡大学、[4]武蔵野短期大学、[5、6]社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園、[7]宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

本研究では2歳児保育室における環境構成を変化させることで、保育者の環境構成に対する意識や子どもとのかかわりがどのように相互作用しながら変化していくのかを明らかにしていくことを目的とする。これまで、研究ⅠとⅡにおいて、環境構成を変化させることによって保育者の周りにいる子どもの数が減少し、環境の変化によって保育者と子どもとのかかわりに子ども理解、視線の用い方、保育者の移動場面で意識の変容が明らかとなった。そこで、次に、保育者自身が保育環境の変化による保育者の意識のあり方の変容について明らかにしようと考えた。具体的には、環境構成変更前後に保育者に保育実践の差異について半構造化インタビューデータを実施、そこで得た言語データを SCAT で分析し、保育者の意識の変容を明らかにしようと考えた。その結果、保育者が子どもの発達に即した環境の必要性を強く意識し、子どもが主体的に遊ぶ環境構成の重要性を感じていることが明らかになった。

キーワード：保育者の意識の変化、環境構成の変化、保育者の援助、SCAT、保育

1　問題と状況

1.1　周囲の子どもの減少と相互作用の変容

研究Ⅱにおいて、環境変化前では保育者に余裕がなく、意図的・把握的な視線で幼児を捉えるために、幼児の思いとは食い違った援助を行う場面や生活の流れを動かそうと保育者自身が移動する主導的な援助が多く見られた。それに対して環境変化後では、保育者に余裕が生まれたために幼児との応答的なやり取りが増え、さらに幼児の思いをくみ取ろうとする視線が増え、幼児の思いに沿った援助を行おうと移動するような幼児の主体性を尊重した援助が多くみられた。

したがって保育実践において、環境の変化が保育者の援助、視線や移動などの行為の変化を生み出していることが明らかにされた。そこで本研究ではさらに、保育者の行為が変化したことによって保育者の保育実践に対する意識がどのように変容したのか、その要因や影響についても明らかにする。そして、それらの知見をもとに、保育実践における環境と保育者の相互作用のあり方について新たな視座を得ようと考えた。

2　研究の方法

2.1 目的

研究Ⅱによって保育者が環境から影響を受けて、保育者が自らの行為を変容させていくことが明らかになった。そこで本研究では、研究Ⅲとして保育者が環境を構成する主体者として、自らの意識がどう変わったのか、保育者に対するインタビューをもとに意識の変容を明らかにする。

2.2 混合研究法としての視点

本研究では、保育者が環境を構成する主体者として、自らの意識の変容を明らかにすることを目的とする。先に示したように、保育者が環境から影響を受けて、保育者が自らの行為を変容させていくことが明らかとなった。

研究Ⅰとして環境を変化させたことに対し子どもの行動が変化したことを量的な手法で明らかにすることができた。次に研究Ⅱとして保育者が自らの行為を変容させていくことを質的に明らかにした。このことを踏まえ、さらに本研究では、研究Ⅲとして保育者自身に半構造化インタビューを行い、意識変容プロセスにおける保育者の思考の実相についても質的な

研究手法を用いて社会的な状況を含めて明らかにすることとした。以上のように、本研究では「Quan→Qual」という順次的探究デザインを採用し、研究を進める。

2.3 研究の手順

本研究では、環境構成の変更前後で保育者へのインタビューデータを基に保育者が主体的に環境構成をする時の意識の変容を明らかにしようと考えた。そこで、4 段階に分けられた明示的な手続きを用いて、言語データから構成概念を抽出し、さらに構成概念からストーリーラインと理論(理論記述)を導き出す研究技法である SCAT(Steps for Coding Theorization、大谷 2007)を用いようと考えた。とくに、SCAT の特徴としては、4 段階に分けることでテキストデータから明示的な手続きで、抽象度の高い語句へと言い換えて構成概念を抽出できる点があげられる。SCAT によって、明示的な手続きで、保育者が意識のメタな部分に関する構成概念が抽出されたときでも、その抽出過程を示すことで保育者に確認がとりやすい。以上の理由により、本研究の保育者が環境の変化にどのように適応したのか、その際の意識の在り様について明らかにするという目的において有効であると判断し SCAT を用いることとした。

最後に、研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通して混合研究法的視点から、保育実践における環境と保育者の相互作用のあり方について考察することとする。

2.4 研究協力者

本研究では、2 歳児の環境の変化に適応する姿を捉えるために、2 歳児のクラス担任を研究協力者とした。

3　結果と考察

インタビューデータを SCAT で分析することによって、構成概念を導きだし、それをもとにストーリーラインを記述し、理論記述を求めた。以下、それぞれのストーリーラインと理論記述を変更前、変更後の順で示す。

3.1 ストーリーライン　環境構成変更前

(1) 保育者は保育室に対して遊び環境構成の容易さ、動線作りの容易さを感じている。子どもの保育環境の適応もみられ、保育者には特徴を生かしている感がある。

(2) 遊びの環境構成では行事誘導的な遊びコーナー、他には定着した製作コーナー、定着したままごとコーナー、静的スペースの設定が常設的にあり、4つの意識的遊びを構成している。その中で保育者主導的な遊びの仕掛けを用い展開しようとしている。

(3) 環境構成は少人数限定で遊べる環境構成であり、保育者は子どもの人数が増えると必然的トラブルが発生することを認識している。そして登園のバスが来て人数が増えると、遊び崩壊開始時間になることを認識している。それは保育者主導の対応限界人数であり遊べない子どもが発生している様子が見られるが、そのことに対し保育者は遊べない子への困り感の欠如が見られる。

(4) また、保育者の中で固定観念的棚配置がありそれは一斉活動重視の棚配置であり、壁側配置適正思考である。

(5) 保育室の欠点として保育者は子どもの様子を見るとき、状況把握的思考があり、盤石の管理体制を敷いているが、管理体制の死角的要因である柱に阻害感をもっている。

(6) またクラスの障害物によって必然的デットスペースが生まれ、なんとか必然的デッドスペースの活用を試みたり、保育室に対する妥協をしたりしている。

(7) 以前は外出簡易な靴箱配置であったが、今は外出困難な靴箱配置になったことで、園庭への出づらさを感じている。

(8) 遊びの仲間関係において保育者は、女児は関係構築の芽生えがあり、ごっこ遊びの確立を感じ供給的応答関係、繋合的モデリング、繋合希求性があると感じている。

(9) 一方男児はモノへの希求がみられ、モノポリー思考でありアンチ繋合希求性であるため遊びストレスからの衝突があると感じている。

3.2　理論記述　環境構成変更前

a.　保育者は行事誘導的遊びコーナー、ままごとコーナー、製作コーナー、静的スペースの4つの意識的遊びを構成し、そこに主導的な遊びの仕掛けを入れている。

b.　保育者主導の遊び環境構成は少人数限定で遊べる環境であり、クラスの人数が増えるとともに遊び崩壊開始時間が近づく。

c.　保育者の環境構成は保育者主導の対応限界人数があるが、保育者は遊べない子どもへの困り感の欠如がある。

d.　遊びの仲間関係において保育者は、女児は関係構築の芽生えがあり、ごっこ遊びの確立を感じ保育者や女児同士での供給的応答関係、繋合的モデリング、繋合希求性がある。

e.　男児はモノへの希求があり、モノポリー思考であり非繋合希求性であるため遊びストレスからの衝突がある。

f.　保育者は状況把握思考があり、副担任と連携して盤石の管理体制を敷いている。

g.　保育室の欠点として、必然的デッドスペース、管理体制の死角的柱、外出困難な下駄箱配置があげられる。

h.　保育者は保育室に対して遊び環境構成の容易さ、動線作りの容易さを感じている。子どもの保育環境の適応もみられ、保育者には特徴を生かしている感がある。

3.3　環境構成変更後　ストーリーライン

(10)　保育者の懸念材料は子ども達が環境変化の認識により不安な姿をみせることであり、子ども達の変化への不適応予想をしていた。しかし環境変化の即時的適応をみせる子どもの姿があった。保育者は安心する居場所と安心する支度手順が変わらずに設定されていたことや明確な生活と遊びの境界線があったことがその要因だと感じている。また登園した際、支度へのけじめができる子どもと支度の乖離をする子どもが居り、保育者は環境変化への混乱と対応を図ろうとしていた。

(11)　遊びの環境構成が変わったことで、保育者は自己選択して遊ぶ子どもや遊び課題を持つ子どもの姿を見取っていた。その中で保育者は憧れ的料理器具のある本格的ごっこ遊びコーナーが子どもにとって魅力的であると感じている。畳では子どもが自然に靴を脱ぎ無意識的生活美を感じていた。また保育者は自発的発展性コーナーを充実させたことにより、多様な遊び保障、動的な子どもの遊び保障をすることができると考えるようになった。そして恵まれた遊びのコーナーは玩具供給－需要バランスの調整をして玩具取り合い学び経験を設定するための基本となると考えるようになった。

(12)　クラスの人数が増え遊びの流動性増になったことで保育者は遊びの同行的援助をするようになった。

(13)　一斉活動では保育室の環境変化によって子どもの動かしにくさが生じ、保育者主導のやりにくさを感じている。保育者は遊びの設定を維持する為に、保育の妨害的棚の撤去をもとめるようになった。

3.4　理論記述　環境構成変更後

i.　安心する居場所と安心する支度手順の設定、そして明確な生活と遊び境界線は子どもの環境変化の即時的順応を促す。

j.　本格的料理コーナーや憧れ的料理器具の環境構成は子どもに魅力的である。

k.　本格的ごっこ遊びコーナーによって子どもは無意識的生活美を感じている。

l.　保育者は自発的発展性コーナーを充実すると多様な遊び保障、動的な子どもの遊び保障をすることができると考えるようになった。

m.　多様な遊び保障の中で保育者が過剰需要による学び経験を設定することは良いことだと考えるようになった。

n.　クラスの人数が増えたことで遊びの流動性増になり、保育者は遊びの同行的援助をするように

なった。

o. 明確な生活と遊びの境界線を作ったことによって、保育者は子どもの動きにくさを感じ保育者主導の活動にやりにくさを感じている。

4 総合考察

4.1 環境を主体的に構成する保育者

環境構成の変化によって保育者は子どもとの相互行為における援助を変容させていった。次に保育者自身は環境の構成者としてどのような捉え方が形成されていったか検討する。本研究において環境構成変更前と変更後の理論記述を基に構成概念図を作成した(図5・図6)。その概観を説明する。

遊び空間の環境構成をする保育者として変更前は保育者主導の遊びの意識が前提としてあり、その上で行事誘導的遊びコーナー、ままごとコーナー、製作コーナー、静的スペースの4つのコーナーを意識的に用意していた。保育者は子どもたちの行動に対して、さらに担任保育者においては副担任に対しても状況把握思考があり、副担任と連携して保育室の中で盤石の管理体制を敷いていた。しかし保育者主導の遊び環境は少人数限定で遊べる環境であったために、クラスの人数が増えるとともに遊びストレスから子ども同士の衝突が生まれ、遊びが崩壊していった。その原因について保育者は2歳児の発達観、特に男児の特性を挙げており遊びが続かないことに関する困り感の欠如が見られた。

環境構成の変更後、保育者がまず一番驚いたのは子ども達が環境構成の大きな変化にほとんど動じることなく生活していたことである。その理由として保育者は明確な生活と遊びの境界線を作ったことによって、子どもの環境変化の順応が促されたと感じている。また遊び空間の環境構成ではカラーボックスのキッチンが造られ、さらにその場には大人が使うような憧れ的料理器具があり、加えて段ボール迷路や製作コーナーや絵本コーナーに仕切りを使ったことによって子ども達は遊びに集中しやすくなったと考えられる。それによって自己選択して遊ぶ子どもの姿、選択した遊びに繰り返し取り組むような遊び課題を持つ子どもの姿、畳のあるごっこ遊びコーナーに入る際に靴をぬぐ姿から見える無意識的生活美を感じる子どもの姿などが見られた。そこから保育者は自発的発展性コーナー、憧れ的料理器具のある本格的ごっこ遊びコーナーの大切さなど多様な遊び保障をする意識が見られるようになった。

また遊びの中での学びにおいて保育者は物の貸し借りの場面を取り上げ、物の取り合いの場面でもただ単純に玩具を調整して葛藤体験をうながすだけでなく、多様な遊び保障がある環境の中で玩具供給ー需要バランスの調整をすることによって過剰需要による学び経験を設定することが大切だと考えるようになった。

しかし相反するように保育者は明確な生活と遊びの境界線の区切りによって保育者主導の活動にやりにくさを感じるようになった。今までは一斉活動ができるように部屋のスペースを広く確保していたため、コーナーによって一斉活動のスペースが狭まることに違和感を抱いていると考えられる。

4.2 3つの役割の変容における相互作用

本研究では保育室の環境構成の変化によって保育者の (1)環境を主体的に構成する役割、(2)自らの人的な環境としての役割、(3)環境と相互作用することで自らの援助を変容させる役割という3つの役割の変化を明らかにしてきた。ここから3つの役割における変化の相互作用について考察していく。研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの結果から相互作用図を作成した。

破線の三角関係が環境構成変更前の保育者の3つ役割における意識である。変更後、子どもの遊び環境が落ち着いたことによって保育者の周りに存在する子どもの数が減少した。このことによって保育者は子どもの目を引く行動から子どもの様子を見守る行動に転換したと考えられる。そして実際の保育者と子どもの相互行為では、環境構成の変更によって、保育者が子どもの遊びのイメージを生かしながら遊びに加わる姿、つまりは保育者からの子ども理解に関わる行為、気になる子どもの遊びに積極的に関わっていくような気になる子どもへのかかわりを深める行為、子どもからの要求に対ししっかりと理解しながら関わっていく子どもとの応答的なかかわりの行為などが見られるようになった。よって環境構成の変更によって保育者主導的な行為から子ども主体的な行為への変容が見られ、同時に意識においても転換してきている様子がうかがえた。

以上のことより、子どもが保育者を頼らず、自分たちで遊ぶ姿が見られるようになり、保育者もまた子どもとの相互行為を変容させたことは保育者が環境構

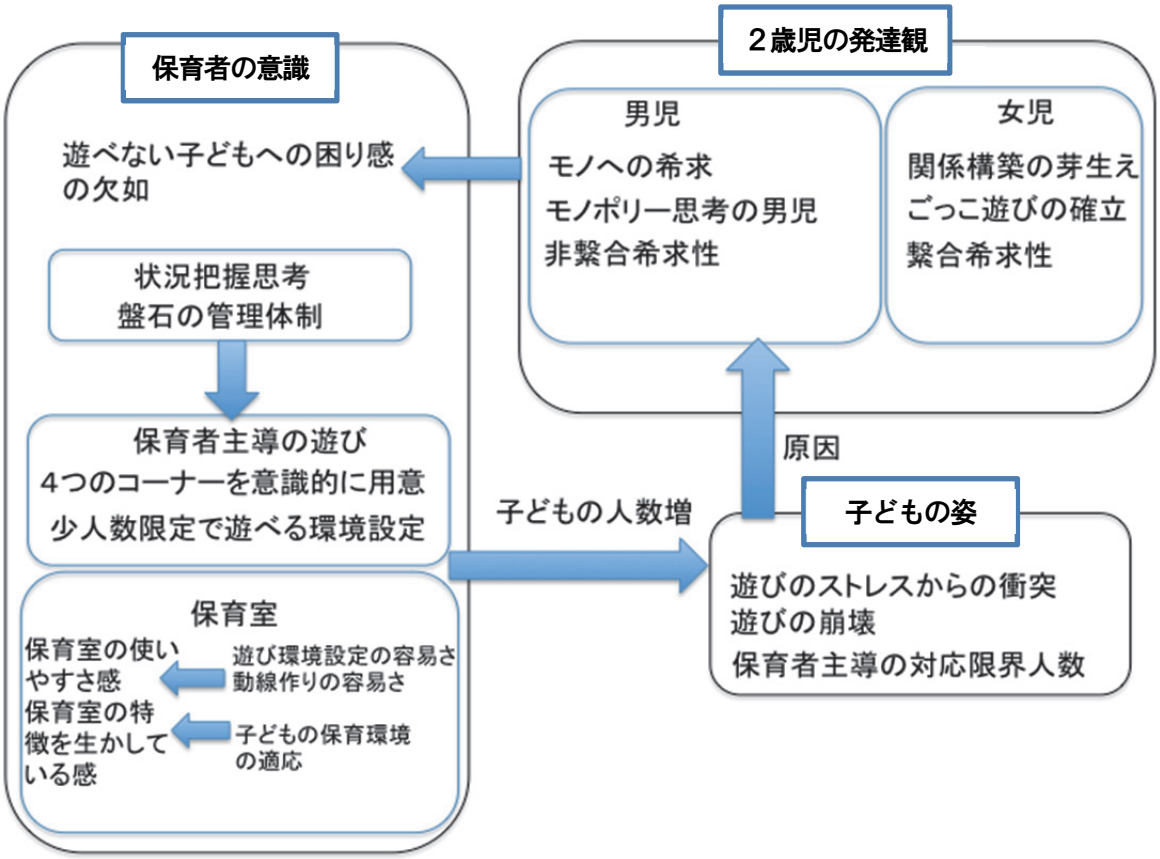

図 5　環境構成変更前の保育者の意識

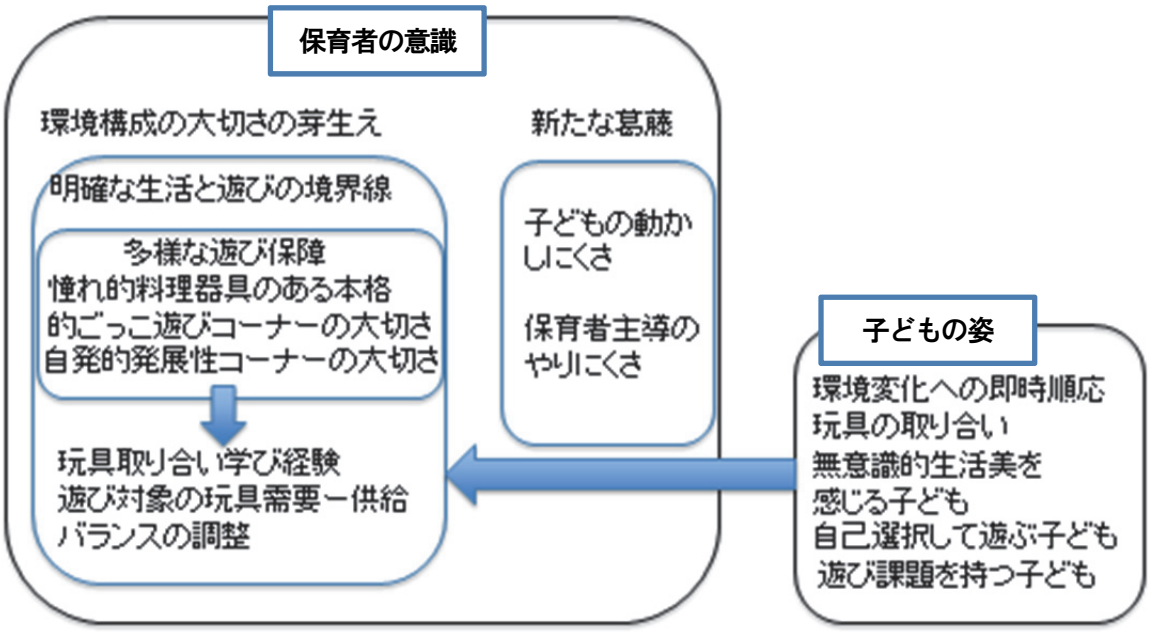

図 6　環境構成変更後の保育者の意識

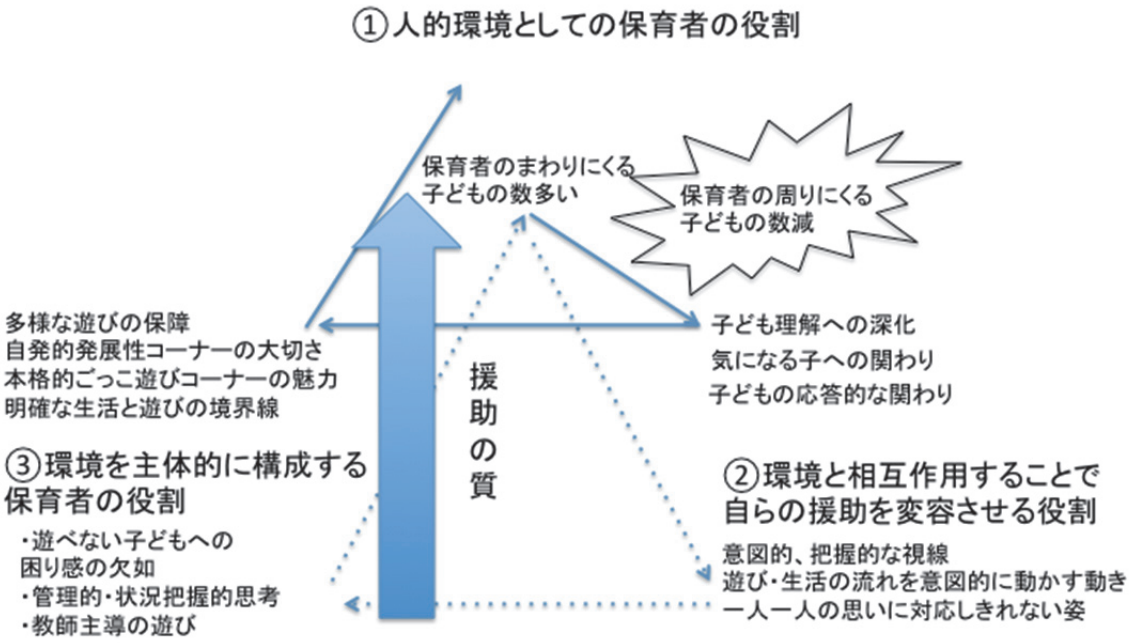

図7　相互作用図

成をする際の意識の変容にも影響されたと考えられる。また、保育者は多様な遊びの保障、自発的発展性コーナーの大切さ、本格的ごっこ遊びコーナーの魅力を感じ、保育者主導的な遊びから子どもが自発的に遊びを展開する環境構成、子どもの発達に即した環境を構成することにおいて意識するようになったと考えられる。

河邉(2001)[2]は「全ての保育行為は保育者が子どもをどう理解するかからはじまる」と述べ、子ども理解を保育の専門性に挙げている。また秋田(2011)[3]らは保育の質における保育構造の質が及ぼす影響について、保育者一人に対する子どもの数の比率が低いと保育過程の質が高くなることを示している。

そしてその一要因として、「保育者一人あたりの園児数が少なければ、保育者はより敏感に適切に対応でき、それに応じた保育環境や保育内容を提供できる」と述べている。本研究では環境構成の変化によって保育者の周りにいる子どもの数が減ることにより、子ども理解をする行為や応答的なかかわりが見られた。そして環境を構成する主体者として保育者は子どもが自発的に遊べる環境を用意することの大切さを実感した。子どもの発達を考慮し、子どもが興味の対象に集中でき、自発的に遊べる環境構成をすることで、保育者の周りにいる子どもの人数を少なくしたことは、保育構造の質や専門性の向上にも繋がったと考えられる。

4.3 おわりに

本研究は環境構成変更後、一日だけの調査に留まったが、環境が新しく変わったことに関する子どもと保育者の動きと意識における変容が見て取れた。一方で新しい環境に慣れてきた時に保育者と環境との相互作用がどうなるか、すなわち子どもの姿を振り返り、次の援助の方向性を見定め環境を再構成する意識の変容について継続的に調査をし、明らかにすることを今後の課題としていきたい。

7. 引用文献

[1] 大谷尚:ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)、54 2、pp.27-44、(2007).

[2] 河邉貴子:子ども理解とカウンセリングマインド－保育臨床の視点から－、pp.111-124、萌文書林、(2001)

[3] 秋田喜代美:保育の質に関する縦断研究の展望、東京大学大学院教育学研究科紀要、51、pp.10-23、(2011).